

グローバル社会で貫く 現場主義の信念と自信

Office 天羽代表、元デュポン株式会社名誉会長 天羽稔さん

淡い紫色のシャツをタンデイに着こなし、柔和な笑みを浮かべるのは、元デュポン株式会社の名誉会長、天羽稔氏。「小さい頃は、人前でしゃべれない赤面恐怖症の子どもでした」

小松島で青果物店を営む両親の元に生まれた。早朝、父親と一緒に市場に行き、購入した青果物を運ぶ。中学では柔道に夢中になった。3年になり、国立の阿南工業高等専門学校を受験しようと決めた。学科は定員が他学科の2倍だった機械工学。「定員が多い方が受かる確率が高そうじゃないですか(笑)」。ただ、進路指導では、その成績では絶対に合格しない」と逆太鼓判。高専はなかなかの難関で、模擬試験の結果が出る度に、進路指導は同じ文言を繰り返したが猛勉強を続け、見事合格。ところが入学後、「実は補欠合格だったと知りました(笑)」

授業の一環に企業実習があった。パイロットになりたかった氏が選んだのは航空機の部品を作る会社の工場。3ヶ月間通ってみて、安全靴を履いて工場に行く仕事は「自分のやりたい仕事とは違うな」。高専には大学編入制度もあったが「受験科目に高専で習わない教科もあって無理でしたね」

就職試験では、航空会社が第一志望。他業種も受けたが面接のときに「パイロットの試験に合格したら、こちらには入社しない。それでもいいか」と強気に、だけど正直に話した。「そ

れでもいいと言ってくれたのは

富士ゼロックスだけ。結果的に入社しました」

東京・武蔵小金井の寮から新大久保の研修センターに通っていた。「通勤電車で寝てしまい、気がついたら東京駅だったなんてことが何度も(笑)」。働き始めたものの、大学進学の際は膨らみ、英国の大学を調べたが入学時期が合わない。米国なら年に4回ある。「で、アメリカの大学に。行くなら退路を断って不転でと決め、会社を退職しました」

21歳で渡米後、語学学校に通った後、6校に申し4校に合格。あえて日本人が一番少ないワシントン州立大学に入学。「専門は機械工学。どうしてもという強い動機ではなく、高校が機械工学だったので(笑)」

学生なのでスチューデントビザでの留学。つまり働けない。が、アルバイトをしないと生活できない。「日給でもらえるアルバイトをしましたね。例えば農家に出かけ、何か仕事はないですかと聞いて回る。ワシントン州はコンバインで小麦を収穫する農家が多く、刈った小麦をトラックで運ぶ仕事とか」。コンバインは斜度が大い丘陵地帯の斜面でも使えるようになってる。ただ、トラックは荷が重くなると斜面でバランスを崩す。例年、転落での死亡事故が多発。命がけの仕事だった。「さすがにこれは1週間で止めました」。柔道の講師もした。

